

三日松前出立、箱館江罷越申候、兼而老人御編述之東遊雜記相携、沿途之勝概、松前の風物比較いたし候所過差無之、老人一過眼の地、烟霞の妙察、全く山水の奇骨を被得候事と、感心不替候○中。來春エトロフよりウルツフ江相進候筈ニ候、兼而御存之通り、去卯年長崎御用より、當未迄五ケ年之間、日本國中西東を究め、海外へ踏出し、經歷二十五ケ國、道程凡八百五十里、打返一千七百里、唐土の里法に直し候は、八千八百里内外に可有之、不佞今年二十九、日本六十六州不佞が如き遠足し者、只一人に不可過、男兒四方の壯遊、本懐之至、欣躍不替候、併五ケ年の間、在宅僅十ケ月、二親の温情を欠候といへども、忠孝不兩全、此一事少々懸念而已ニ候○中。

六月廿一日寛政十一未年也
同十二月晦日備中著

古松軒老人

守重

〔東遊記一〕凡例

一予醫學修行の爲に漫遊する事、前後合せて五年、東西南北到らざる所なし○中。

南谿誌

〔續近世畸人傳二〕百井塘雨

百井塘雨は通名左右二、京師の人也、其兄は室川の豪富萬屋といへるが家長をして有けるによりて、おもへらく、商家とならば此ごとく富むべし、然れどもおよぶべからねば、及ぬことを求んより、我欲する名山勝槩をたのしむにしくはなしとて、金三十斤を携へ、にしは薩摩、日向、東は奥羽外が濱のはて迄を窮む、其記事有といへども稿を脱せず○下。

〔狂歌現在奇人譚三編下〕百種園有武の傳

有武は浪花の産にして、氏は中邑、名は得、字は玄機、別號南嶺といふ、醫をもて業とす○中。旅にいくづることをこのみて、わが日のもとのうちには、ふまざる地なく、見ざる名所なく、すべて旅にある